



愛隣幼稚園..... 園だより 13. 11月号

子育ての中で私と向き合う

運動会が終わりました。一生懸命になって夢中になってこの日を過ごした子どもたちでした。真夏に戻ってしまったのかと思うほどの暑さの中、きっと疲れきっていたはずですが、でも、「さようなら。」と言葉を掛けながらその表情に映るひとり一人の想いに心を傾けてみると、そこには今朝までの子どもたちの姿はすでになく、日に焼けてひとまわり大きくなった子どもたちの表情からは、確かな自信が伝わってきました。心の底から楽しんで、力いっぱい頑張る経験がもたらすもの手ごたえを感じながら、17年前の長女の姿を思い出しました。2年保育、ばら組から愛隣幼稚園にお世話になりました。入園するまでもそうでしたが、見ている親が歯がゆくなるほどの小心者で、石橋を叩いて渡らずに帰って来てしまうような子でした。幼稚園に入っても毎日毎日テラスの柱につかまり仲間たちのすることを見ているだけという日々が続き、そのまま1学期が終わりました。2学期に入り幼稚園は運動会に向けて動き始めました。当時も野外劇があり、その頃、少しずつテラスの柱から手を離し動き始めていた彼女のあそびもこの野外劇の中で取り上げられ、自分も登場人物の一人となりました。運動会当日、恥ずかしそうにでも嬉しそうに演じる彼女の姿がありました。この運動会を境に彼女の幼稚園での生活は変化しました。少しずつ自分らしさを出しながら、仲間との生活を楽しめるようになっていきました。しかし、持って生まれた性格はそうそう劇的には変わらないものです。イベントの前には必ずお腹が痛くなるという小・中・高・大学生活でした。その上、必死なわりには間違いだらけの私の子育てのお陰で、もう少し天真爛漫に生きられたところもかなりの苦勞を強いられていました。思春期にも様々な試練が次々と起こり（一部は親の責任）親子共々格闘の日々でした。7、8年ほど前のことだったでしょうか。ドロシー・ロー・ノルト作「Children Learn What They Live」という詩に出会いました。（本来ならばここにその詩をご紹介したいところですが、著作権の問題があります。お手数ですがインターネットで検索してみてください。）親によるネガティブで拒否的な言動の中で育てられた子どもは、自らもネガティブな発想や言動をする子どもになる。一方、親によるポジティブで受容された環境の中で育てられた子どもは、自らもポジティブな発想をするようになり安心と安定の中で過ごすことができる子どもになる。それは特別なことでもなく、目新しいことでもありませんが、子どもと向き合う親やおとながどんな態度で接するかによって、子どもの未来は大きく変わるのだということが、厳しい言葉で私たちにつきつけられています。私も「やってしまった」と大いに反省を迫られました。我が子の気になる言動は、実は私が彼女に接してきた態度がどんなものであったかを映しているのではないかと、気付かされました。親は子どもの将来に様々な願いをもちます。小心者の娘には、失敗を恐れるな！当たって砕けろ！失敗してもやり直せる！と励みながら、もっと自分に自信を持って大らかに生きられたらいいのに、と願います。にも関わらず、私自身が娘に対して決して大らかではなく、失敗も許すことができずにきました。変わるべきは<私>だったのです。子育てはいつも自分自身との闘いだと思います。生まれて間もない小さな命に向き合う時も、思春期の厄介さに直面する時も、最後は自分自身の生き方を問われているのです。だからきっと私たちはしばしば正面から向き合うことが苦しくて逃げ出したくなるのです。問題は我が子だけではありません。もし、世界中の子どもたちから底抜けの笑顔が無くなってしまったとしたら、それは子どもの問題ではなく私たちおとなの問題なのです。あの台風の朝、一人暮らしの娘は私の心配をよそに1時間早く実習先の施設に向いました。「こんな日にも定時に出かけなければならないのか、たかが実習だ。」とすっかり親モードの私は無事にたどり着けるのか心配でなりませんでした。1時間後、携帯に送られてきた彼女からのメールには「1時間も早く着いたから、500円の朝ごはん！」という本文に、美味しそうなモーニングの写真が添付されていました。17年前の彼女からは想像もつきません。いつの間にこんなにポジティブな娘になっていたのやら。ついに追い抜かれてしまいました。私はまだ子育ての道半ばです。